

[全国国際教育研究大会]

高校生が実践する 国際協力の研究発表

「国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会」を開催

第59回全国国際教育研究大会が、8月18日、19日に国際協力機構(JICA)の「JICA地球ひろば」で開催された。高校生弁論大会のほか「国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会」が行われ、全国8校の高校生がグローバルな視点から捉えた社会課題に対する活動や研究成果を発表した。



国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会に参加した高校生=大会事務局提供

コロナ禍で内なる国際化促進へ

全国国際教育研究大会では、高校生による「国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会」を毎年開催している。今年は新型コロナウイルスの感染防止策として、各学校から中継での発表となった。

「国際協力機構JICA地球ひろば所長賞」には、青森県の八戸聖ウルスラ学院高等学校の「『いったい誰が悪い？技能実習生問題～地方における多文化共生を私たち高校生が担う～』」が選ばれた。同校では2019年から外国人労働者をテーマに研究しており、今大会では地域社会での技能実習生に対する否定的な意見や認知度が低いという実態について、その背景や解決に向けた取り組みを紹介。まずは自らが実習生との関係を深めるため実習生に日本語を教えたり、地域住民への発信活動として八戸駅に手作りのポスターを掲示したり、さまざまな活動を展開する。今後、さらに外国人労働者を日

本に呼び込むためには顔の見える関係づくりが重要だと訴えた。

「国際交流基金賞」には兵庫県立神戸商業高等学校の「ESDで外国人が住みやすい街づくり」が選ばれた。高校生らは、神戸に住む外国人のために日本語や日本の慣習を遊びながら学べる「にほんごすごろく」を作り、夜間中学に通う外国人と交流した実践研究について報告。すごろくでは「何月何日におせちを食べますか」といったクイズや「けん玉に挑戦」といったカードを用意し、日本文化に触れられる工夫を凝らしたという。

審査員長のJICA地球ひろば所長、竹田幸子氏は「コロナ禍で国内に目を向け、日本と自分たちの地元がwin-winになる活動を心がけた発表だった。さらに国内の内なる国際化を目指す工夫も見られた」と総評した。

環境破壊が新興感染症を生む

大会1日目には、高校生の視点から国際理解教育に関する課題提

受賞結果

- ◎国際協力機構JICA地球ひろば所長賞
『いったい誰が悪い？
技能実習生問題～地方における
多文化共生を私たち高校生が担う～』
八戸聖ウルスラ学院高等学校
- ◎国際交流基金賞
『ESDで外国人が住みやすい街づくり』
兵庫県立神戸商業高等学校
- ◎日本国際協力センター賞
『「Think Globally, Act Locally」
～ラオスを想い、高知でできること～』
高知市立高知商業高等学校
- ◎全国国際教育研究協議会会長賞
『科技校から11646km
～インドとの交流を通して～』
東京都立科学技術高等学校
- ◎国際理解・国際協力奨励賞
『地球から世界へ！
「もったいない」を世界に歌で発信！
五高生もったいない音楽プロジェクト』
東京都立五日市高等学校
- 『聖徳学園と世界をつなぐ』
聖徳学園高等学校
- 『おうちDE留学』
兵庫県立太子高等学校
- 『Pamodzi
～このバッグでげかわいっちゃが～』
宮崎学園高等学校